



CQM(超短期経済予測モデル)

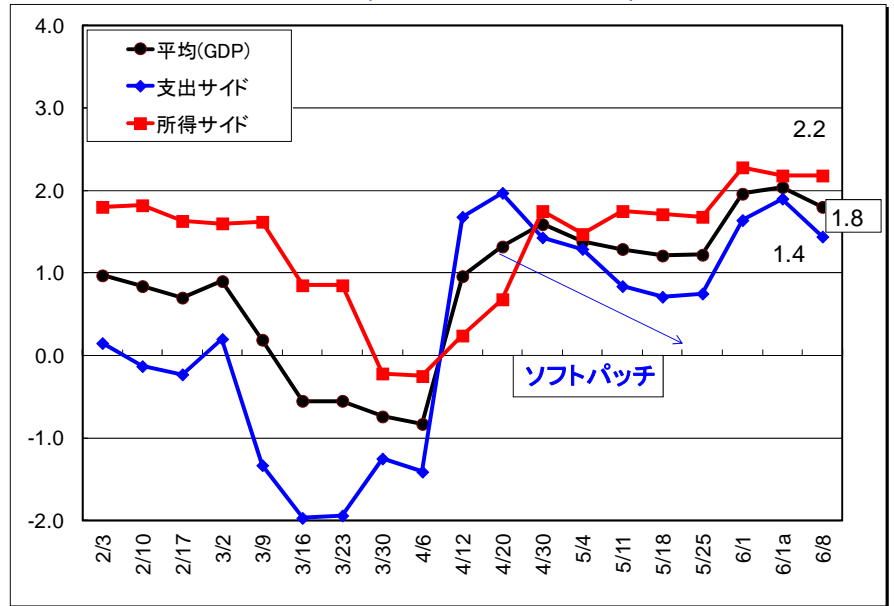
熊坂侑三 (APIR リサーチリーダー, ITエコノミーCEO)
内容に関するお問い合わせは下記まで
e-mail:kumasaka@iteconomy.com

米国経済(週次)予測(2012年6月8日)

ポイント

- ▶今週のCQM予測に大きな影響を与えたのは、3月の製造業在庫が大きく下方に改定されたことである。
- ▶4月の個人所得・消費支出統計が更新されて以来今期のヘッドラインインフレ率は1.5%程度になっている。
- ▶5月の失望的な雇用統計、スペイン経済が危機的になった欧州債務危機の深刻化に対して、4月・5月の経済活動を調査したページブックは緩やかな経済成長を確認した。
- ▶このような景気に対してよし悪しミックスなシグナルから、市場は6月19-20日のFOMCミーティングにおける金融政策の変更に焦点をあてるようになった。
- ▶しかし、6月7日のBernanke連銀議長の議会証言も金融政策に関して何のヒントも与えず、相変わらず、ハト派・タカ派の景気・金融政策の意見の相違は続いている。実証分析でこれらの溝は狭められるのだが。

CQM 予測の動態：実質 GDP 成長率
2012Q2 (%，前期比年率換算)



<連銀エコノミストは実証分析で景気・金融政策の考え方の溝を狭めるべし>

6月8日のCQM予測は4月の工場受注、消費者信用残高、製造業・卸売業在庫、貿易収支、5月の農産物価格を更新した。その結果、今期の支出サイドからの実質GDP伸び率は1.90%から1.44%へ下方修正され、所得サイドからの実質GDP伸び率も2.18%から2.16%へと下方に修正された。ヘッドラインインフレ率は1.5%程度に予測されている。

5月の失望的な雇用統計、欧州債務危機の深刻化に対して、4月初期から5月後半までの経済活動を調査したページブックは緩やかな景気回復を認め、米景気に対してよし悪しミックスな情報となった。市場は6月19日、20日のFOMCミーティングにおける金融政策の変更に注目し始めた。そのヒントとして6月7日のBernanke連銀議長の議会証言に注目したが、彼は何のヒントも与えず市場を失望させた。

連銀エコノミストの方はハト派・タカ派で相変わらず景気・金融政策の見方が分かれている。一つの驚きはハト派のクリーブランド連銀のSandra Pinalto総裁が「5月の悪い雇用統計が新たな金融緩和政策に必ずしも結びつかない」と言い出したことである。

CQM予測からみれば、実質最終需要、国内需要などの成長率(2012Q2)は2%~3%と予測されており、6月のFOMCミーティングの最終結論は「Wait and See」政策に落ち着くだろう。

FOMC声明はほとんど「Moderate Growth」で合意する一方、いつまでも連銀エコノミストの間で景気・金融政策について相違がみられることは市場・企業にとって金融政策の透明性というよりも、マイナスの影響を及ぼす。これらの連銀エコノミストの考え方の相違は潜在成長率、構造的失業率、オペレーションツイストの効果などの実証分析によってかなり溝が狭まるはずである。

- ・本レポートは執筆者が情報提供を目的として作成したものであり、当研究所の見解を示すものではありません。
- ・当研究所は、本レポートの正確性、完全性を保証するものではありません。また、本レポートの無断転載を禁じます。
- ・お問い合わせ先：一般財団法人アジア太平洋研究所 contact@apir.or.jp 06-6441-0550